

中世初期の強調表現に関する考察

——「こそ」の用法を中心として——

蔵 野 嗣 久

序

係結の法則とよばれる「ぞ」「なむ」「こそ」の三助詞による強調表現は、平安朝において著しい隆盛をみ、和文脈の文章の中で好んで用いられたが、中世になると「ぞ」「なむ」による表現は漸次用いられなくなり、ただ「こそ」による表現のみが中世末期に亡びてしまふまではほぼ保たれていたとされている。この係結の法則の崩壊現象は古代語から近代語へ転換する指標の一つとして注目されているが、それが具体的にどのような過程をたどっているか未だ明かにされていない。私は手始めとしてこゝに中世初期という一時期をとり出し、当時の表現がどんなものであるか、果してその過程を解きほぐす手がかりが得られるものであるか、「こそ」の用法を中心に考察してみようと思う。以下、通例に従って本稿に使用した資料、法華修法一百座開書抄・打聞集・今昔物語集・梅沢本古本説話集・宇治拾遺物語（註1）を中世初期の言語を反映したものとみなして考察をすゝめることにする。

まず、「こそ」による強調表現は当時一般的にどのような表現上の特徴をもっていたかということをおこころ。すでに平安朝の場合について試みられているように（註2）、類似の強調表現である「ぞ」「なむ」の場合と比較しながら考えてゆくことにする。

資料	助詞	ぞ	なむ	こそ	合計
法華百座		7	71	49	127
打聞		7	35	14	56
今	天竺震旦	63 (1)	90 (331)	86	239 (332)
	本朝前半	276 (6)	211 (323)	221	708 (329)
昔	本朝後半	517 (1)	645 (248)	539	1701 (249)
古本説話		62	38	72	172
宇治拾遺		235	117	276	628

〔第一表〕

最初に、用例数を掲げておくならば第一表のようになっている。「括弧の数は各説話末にある「一語リ伝ヘタルトヤ」型の定形式の表現。以下、これを算入しないことにする」（註3）。三助詞相互を比較してみるために、各々合計数との比率を出してみると第二表のようになる。資料によつて出入があるのは、

助詞		ぞ	なむ	こそ
資料				
法華百座		6	56	38
打聞		12	63	25
今	天竺震旦	26	38	36
	本朝前半	39	30	31
昔	本朝後半	30	38	32
古本説話		36	22	42
宇治拾遺		37	19	44

〔第二表〕

資料の性格の差異によると考えられる。この表を永井洗氏が平安朝の資料について調査された第三表(註4)と比較してみるに、資料の性格の差異を考慮に入れるならば、三助詞の消長に大きな変動はなく、勢力関係は均衡を保っているといえよう。

助詞		ぞ	なむ	こそ
資料				
竹	取	19	55	26
伊勢		13	76	11
土佐		74	21	5
空穂		12	46	42
蜻蛉		44	39	17
落窪		11	52	37
	枕	30	13	57
和泉		31	27	42
源氏		24	38	38
紫記		57	11	32
更科		32	33	35
夜半		29	13	58
大鏡		34	10	56

〔第三表〕

安朝後期むは平た「なえよう。保つているとい

び多数用いられているのである。次に、三助詞の使用されている場面を会話文・心理文・地文の三つに分けて考えてみよう。会話文・心理文は感情表現の場で主観性の濃い表現となり易く、地の文は叙述説明の場で客観性の濃い表現となり易いという差異がみられるからである。用例数をまとめる

助詞		会話文	心理文	地の文
資料				
法華百座		22	0	49
打聞		18	0	17
今	天竺震旦	53	1	36
	本朝前半	75	1	135
昔	本朝後半	142	3	500
古本説話		12	0	26
宇治拾遺		40	0	77

〈なむ〉〔第五表〕

助詞		会話文	心理文	地の文
資料				
法華百座		1	1	5
打聞		3	1	3
今	天竺震旦	13	3	47
	本朝前半	26	6	244
昔	本朝後半	40	19	458
古本説話		8	3	51
宇治拾遺		29	10	196

〈ぞ〉〔第四表〕

ならば第四表、第六表のようになる。これらの表によれば、概して「ぞ」は地の文に多くて会話文・心理文に少く、「こそ」は会話文・心理文に多くて地の文に少い。この二助詞は平安朝の場合とほぼ同様の傾向を示している。ところが「なむ」は会話文に多い

ことは平安朝の場合と似ているが、一方地の文にもそれを凌ぐほど多いのであって注目される。宮坂和江氏は平安朝の「なむ」について「麗々「ける」と慕んで古物語の「地」の叙述の強調形式として用ゐられた」とし、「なむ」は恐らく話言葉に多く用ゐられ、転じて文章形式語として一つの話語り伝へる際の表現となったのであらう(註5)とされたが、そういう「なむ」が説話文学の表現形態に都合よいものとして多数採り入れられた結果、このような数

資料	助詞		
	会話文	心理文	地の文
法華百座	14	5	30
打聞	12	2	0
今	天竺震旦	61	20
	本朝前半	119	71
昔	本朝後半	319	127
	古本説話	34	18
宇治拾遺	195	59	22

<こそ> (第六表)

えよう。ところで先に「なむ」は平安朝後期に漸次衰退していったのが当期に再び多数用いられたと述べたが、この資料性にかゝわる特殊な「なむ」を考慮すればやはり漸次衰退という方向でとらえられるのではなからうか。

次に、三助詞に対応する結びの語からその性格を考えてみよう。

三助詞の性格が結びの語の性格と緊密な関係にあることは周知の事実である。第七表はその用例数を示したものである(註6)。この表によって要約しうる差異をいくつか列挙しておこう。

- (1) 「ぞ」「なむ」は特定の語に偏る傾向があるが、「こそ」はそれほどでない。
- (2) 「けり」は「ぞ」「なむ」に非常に多く、「こそ」にはそれほどでない。
- (3) 推量の助動詞は「こそ」に非常に多く、「ぞ」「なむ」に少い。
- (4) 形容詞は「こそ」に多く「ぞ」「なむ」に少い。

値を示すこととなったのであろう。即ち、資料性の問題と考えられ、その端的な例が今昔物語各説話末の定形式「〜ナム語り伝ヘタルトヤ」であると思ふ。結局、「なむ」はこの表に関しては二面性が現われているとい

- (5) 「つ」は「こそ」に多く「なむ」がこれに次ぎ、「ぞ」に少い。
 - (6) 「たり」は「ぞ」「なむ」に多く、「こそ」にはそれほどでない。
 - (7) 「なり」は「こそ」に多く「ぞ」がこれに次ぎ、「なむ」に少い。
 - (8) 打消の助動詞は「こそ」にはあるが、「ぞ」にはみられない。
- 右の(1)は「ぞ」「なむ」の用法の固定化を思わせるが、平安朝にもその傾向があり特に新しい現象ではない。さて、(2)・(3)の諸点を考えてみるに、「こそ」は主観性が濃厚で判断機能にかゝわるものに多い。これは「こそ」の性格を反映しているのであり、会話文・心理文に多いことに一致している。また「ぞ」は多くの点で「こそ」と対立的であつて、客観性の濃厚な説明表現であることを意味しており、地の文に多いことに一致している。一方「なむ」は種々の点で「ぞ」に類似しているが、意志的表現といわれる「つ」との対応や会話文に多いことなど「こそ」との類似点もかなりの比重がかかっている。つまり「なむ」の二面性は否定しがたいといえよう。ただ「ぞ」により近いことだけは確かである。思うに「なむ」は語り伝える際の強調表現というところにのみ本質的な意義があるのではなからうか。「なむ」は古くは宣命や歌物語の地の文に多いのであり(註7)、中田祝夫博士が平安朝の人「ぞ」と「なむ」との相違は、「なむ」が会話の個所に多く用いられ、和歌には見えない点である。しかし、「なむ」は落窪物語以前の作品では地の文にもかなり見られるので、簡単に「なむ」を談話語とはいひ難い。V(註8)とされたの

は、その意味で注目されよう。

ところで永井洗氏は平安朝における三助詞の本質意義について、対応する結びの性格を重視しそれが作品・作者・時代等によって左右されず本質に基くことを実証し、場面による分析を傍証として次のように帰納された。

即ち、「ぞ」は具象的事象として認識せられたものを客観的に説明する場合に使用せられ「なむ」は観念的事象として認識せられたものを主観的に説明する場合に使用せられるのである。而して「こそ」は「なむ」と等しく主観的ではあるけれども、「なむ」の本質が説明にあるのに対して「こそ」の本質は判断にあると言ふことが出来る。

この結論は「なむ」について問題を残しているが、「こそ」に関する限り同様の考察過程を経て如上の結果を得た中世初期の場合にも妥当するといえよう。

二

では中世初期の「こそ」による強調表現は平安朝の場合と相違するところがないのであろうか。前章の考察は統計的処理を行ったにすぎないのであって、これのみでは全面的に肯定するわけにはいくまい。当時、連体形終止文は相当多数みられるのであって（註9）、連体形結びとなる「ぞ」「なむ」は存在価値を喪失つゝある時期であり、それに関連して「こそ」も何らかの形で時代性を反映しているであろうことは充分考えられる。そこで個々の用例を探りあげて考察をすゝめてゆくことにしよう。

「こそ」を検討するに先立って、「一応「ぞ」「なむ」を検討してお

こう。「なむ」は平安朝後期以後衰退の一途をたどっているわけであるから、「ぞ」がかつての「なむ」の用法をおかすこともありえよう。事実、それは結びの語との対応で「ぞ」「なむ」が類似の現象を示していることによつて明らかである。しかも第一表のように、説話末の定形式に「ソ語り伝へタルトヤ」があることは、それが相当程度進んでいることを証明していると思われる。その上、更に次のような例がみられるのである。

大臣「糸懸キ態ヲモ被レ為ケルカナ」トゾナム咲ヒケル。（今昔22の8）

此国ノ内ニハ上下ヲ不レ論ズ、功德ヲ造ル講師ニハ国ノ一ノ供奉ゾナム必ズ請ズルニ、（今昔20ノ35）

然バ放生ハ心有ラム人ノ専ニ可レ行キ事也トゾナム語り伝ヘタルトヤ。（今昔20ノ15）

即ち、両助詞を重複して用いているのである。

では「こそ」の場合はどうであらうか。もともと「こそ」は会話文に多く用いられる表現であるから、注目されるのは地の文に用いられた用例である。そこで地の文の「こそ」を検討してみると、作者が話末でその説話に関する感想を述べた部分に多く、主観性の濃厚な判断表現という「こそ」本来の性格に矛盾していない。しかし、地の文として純度の高い叙述説明の場に用いている用例もある。

此ノ度ハ強ク縛テ引ヘタリケレバ、暫クソソ人ニテ有ケレ。痛ク責ケレバ遂ニ狐ニ成テ有ケルヲ（今昔27ノ42）

暫クソソ念ジテモ居タレ。既ニ十日許ニモ成ヌレバ、力无クシテ可ニ起上レキ心地セズ。（今昔16ノ4）

助詞	結び資料	る・らる	つ	ぬ	たり	り	き	けり	けむ	らむ	む	むず	めり	
そ	法華百座										1			
	打聞			1			1	3						
	今	天竺震旦		3				2	41			2		
		本朝前半			1	5	1	3	205			5	1	1
	昔	本朝後半	3	1	1	11	1	4	351		10	1		
	古本説話				2		1	33			1	1		
	宇治拾遺				11		7	136		5	3	2		
	計		3	4	3	29	2	18	769	0	5	22	5	1
な	法華百座		1	2	1	2	3	27			1			
	打聞		2		1		3	8					2	
	今	天竺震旦		2	1	1	2	10	24			1		
		本朝前半		2	1	11		4	103			2		
	昔	本朝時半	1	11	2	12	1	18	400					
	古本説話		1		1		1	17						
	宇治拾遺		4		2		4	44			2			
	計		1	23	6	29	5	43	623	0	0	6	0	2
こ	法華百座		2				1	3		2	4		4	
	打聞				1		2	3			1			
	今	天竺震旦		3	1			2	12	2		11		5
		本朝前半	2	10	3	2		4	38	5	3	48		7
	昔	本朝後半	1	28	11	8		10	80	9	9	120	2	21
	古本説話		4		2		3	13		2	16		2	
	宇治拾遺	1	13	1	6		12	35		4	50	1	11	
	計		4	60	16	19	0	34	184	16	20	250	3	50

べし	きし	きじ	じ	ず	なり	動詞	補助動詞	形容詞	形容動詞	破格の	活用	助詞	文末	下へ続く	その他	合計
1							2	1						2		7
							1			1						7
1					1	4		1		1				3	4	63
7					1	16				9				13	8	276
4					12	33	1			9	3	5	54	13		517
					2	5					1	12	2	2		62
1	1				6	24				2		26	11			235
14	1	0	0	0	22	85	2	1		22	4	43	85	27		1167
7						17				1		1	3	5		71
						15						1	2	1		35
2				1	2	21				6			9	8		90
4		3			2	41	1			4	1	7	18	7		211
6		3			5	52	3			10	1	37	63	20		645
1						8				1		1	6	1		38
4		1				15				5		21	14	1		117
24	0	7	0	1	9	169	4	0		27	2	68	115	43		1207
	1			2	3	19							6	2		49
					4							2		1		14
					5	10	2			2	1	8	5	17		86
1					12	20	4	4		11	2	18	16	11		221
5	2	1	2		25	46	24	2		23	5	39	36	20		539
		1			3	9	2			1		5	8	1		72
1	2			8	18	38	7	3		7	6	33	17	2		276
7	5	2	2	10	66	146	39	9		44	14	105	88	64		1257

〔第七表〕

従者トモニ人行テ見ケレバ、毛モ无ク老タリケル狐ノ、楯ノ枝一ツ
昨ヘタリケルガ、腹ニ箭ヲ二ツ被ニ射立ニテコソ死テ臥タリケレ。

(今昔27ノ37)

御こしのかたびらよりあか色の御あぶぎのつまをこそ、さし
いださせ給たりけれ。(古本1)

わたうたちこそさせるのうもおはさねば、物をもおしみ給へ」と
いひてあざわらひてこそたてりけれ。(宇治3ノ6)

右の諸例は事件の展開を叙述説明している表現であつて、主観的な
判断表現とは考え難く、その意味で「ぞ」「なむ」に近い表現とい
えよう。このように客観性の濃厚な表現はまず「こそ」に特有な逆
接前提句の場合において始まったのではなからうか。なぜならば、
「ぞ」「なむ」には逆接前提となる機能はなく、従つて接続助詞を
介して下へ続いていく逆接前提句においては「ぞ」「なむ」による
強調表現よりも「こそ」による強調表現の方が使い易いからであ
る。もっとも大野晋氏によれば、「こそ」已然形は平安朝におい
て八語りの世界一恐らく日常口頭語の世界一では依然として、奈良
時代の、逆接前提句の形式および、その類似の用法が一般的に行は
れてゐたのである。(中略)。源氏物語などにおいてすら、地の文
では逆接前提の系統に属する「こそ」の用法が圧倒的に多く、単純強調
の「こそ」は少ないV(註10)という状態であつたから、当然のことか
もしれない。次に当期の用例を示しておこう。

家本ヨリ広ク造タレバ、祖先テ後ハ住ミ付タル事コソ无ケレドモ、
屋許ハ大ニ空ナレバ片角ニゾ居タリケル。(今昔16ノ7)

其レニ一人ニ二三石ノ蜂ノ付タラムニハ少ヤヲコソ打致シケレド
モ、皆被ニ整致ニケリ。(今昔29ノ36)

右は逆接前提となつていながら叙述説明した表現とみられる。しか
し、順接の場合も次のように用いられている。

含タリケル飯ヲコソ、其ノ御器ニ亦吐入レタリケレバ、只其ノ器
乍ラ食ツルヲダニ、侍共モ主モ穢ナリト見ツルニ、(今昔28ノ
34)

仏ハ此ル中ヲバ別ネトコソ返マス教ヘ給ケル事ナレバ、思ヒ念ジ
テ居タル程ニ、(今昔19ノ1)

以上地の文として純度の高いところに用いられている「こそ」の多
くは客観性の濃厚な叙述説明の表現である。少くとも前草で結論し
たように主観的な判断表現とみるわけにはいきまい。このことは「
こそ」けれ」が絶対数の上でかなりの数にのぼることが傍証になる
であらう。

このようにみてくると、「こそ」已然形」にも叙述説明の表現と
考えられる用例がみられるのであつて、それは「ぞ」「なむ」にと
つて代らうとするかの傾向をみせており、新しい方向と認めること
ができるのである。

三

以上、「こそ」による強調表現が当時どのような様相を示してい
たかを平安朝の場合と対比しながら考察してきた。これらは係結の
法則に則つた表現であつた。ところが当期には他にこの法則に妥当
しない特殊な表現がみられる。所謂文法的破格と呼ばれてきたもの
がそれである。これを今仮に特殊型と名付け、以下分類して考察を
すゝめてゆこう。

△特殊型一V

次に列挙する「こそ」はBの語で已然形結びとなっているが、意味上ではAと対応すべきものである。これは複文構造の特殊型である。

父母打次ギテ死ケレバ、兄ノ男有ケルモ、父返返モ云付ケレドモ、万ノ財ハ我レ独コソ取ラムト思ケレ。 (今昔31ノ5)

おのれをこそ世の人のしたかほよしといふとき。いかなる事ならん。(宇治9ノ8)

其ノ替ニハ破タル平足駄ノ片足ヤ、舊尻切ノ壞タルヤ、舊鬘者ノ切タルナドヲコソ、求メテ籠テ被置ルト聞侍ツレ。 (今昔28ノ30)

其ノ止事先キ兵ニテ坐スレバコソ、兼忠ヲ致シタラム人ハ、安クハ不有マジトハ思ツレ (今昔25ノ4)

△特殊型二▽
次の「こそ」は意味上Aと対応しており、下へ続く故そこで已然形結びは消去されるべきものであるが、Bで已然形終止となっている。これは重文構造の特殊型である。

今は君ヲコソハ神ト仰ギ奉テ身ヲ任セ奉ラメ。只仰ノマム。(今昔26ノ8)

此ノ垣ノ内ニ入テ、大キナリシ蕪一ツヲ取テ穴ヲ彫テ、其レヲ娶テコソ本意ヲ遂テ、垣内ニ投入テシカ。 (今昔26ノ2)

次の例は下へ続くが構文上特殊型一に相当する故異型といえよう。

門よりこそ出すべき事にてあれ。(宇治2ノ6)

△特殊型三▽
この型は「こそ」と対応する結びとの間に他の係が入って、結びが

乱れている場合である。

若シ僻ミテ不參ザラムヲ、強ニ馬ニ抱キ乗セム事コソ何ナルベキ事ニカ有ラム。極テ恐レ可ク有キ事カナ。(今昔12ノ34)

賢ク思ヒ懸ヌ人ヲ得給テ、娘ノ平カニ御サムズルコソ、何ニ喜ク思スラム。(今昔26ノ8)

構文上、A・Bの対応は緊密であるが、Bはまた「こそ」の結びにも当る語であり、これに呼応して已然形結びとなつてよいはずである。しかるにそうならないからやはり特殊型の一つと認めるべきであらう。

△特殊型四▽
次の例は「ましかばまし」という呼応の中で使用されている。この呼応は絶対的のものではないが史的事実として知られている(註11)ので特にとり出して考えておこう。

哀レ此レガ男ニテ有ラマシカバ、合フ敵无クテ最手ナムドニテコソハ有マシ。(今昔23ノ24)

其不御マシカバ、此身コソハ出テ神ニ被食マシト思ヘバ、只我レ替テ出ナムト思フ也。(今昔26ノ8)

「こそ」に呼応して已然形結びとなるべきはずのBがそうならないのである。しかし、已然形結びとなっている例もある。

我レ男ニ具シテ可有キ宿世有ラマシカバ、前の男コソ不レ死ズシテ相具シテ有ラマシカ。(今昔20ノ13)

仏師のもとにてつくりたてまつらましかば、そこにこそは物は

まいらましか。(宇治9ノ4)

この異型としては次の例があげられる。

夜べみつけまいらせざらましかば、かやうにこそ候はまじ。(宇治2ノ8)

いみじからんことありともたえ入はてなば、かひなくてこそやみなまし。(宇治7ノ5)

△特殊型五▽

次の諸例は「こそ」に対して連体形で結んでいるものである。

此ノ国ニ王在ツル時コソ、其ノ羽ニ隠レテ不レ被レ破ズシテ有ツル。(今昔 10ノ31)

そひて二三町ばかりいけども、我に人こそ付たると思たるけしきもなし。(宇治 2ノ10)

こしのもとには、はわくそと物ゝあとこそ候し。それを御らんせよ。(古本 56)

△特殊型六▽

次の諸例は「こそ」に感じて終止形で結んでいるものである。

脇取りヒシガレヌベキ女房ノ力ニコソ有ケレ。此レ許ニテコソ支駄モ被レ碎ヌベカメリ。由无シ遊ナム。(今昔23ノ24)

哀レ此コソ我レニ衣得サセニ出来ル人ナメリト思ケレバ、(今昔25ノ7)

吉キ折節ニコソ参リ会ヒ候ニケリ。実ニハ可レ申キ事ノ候ヘバ此ク度々参リ候ツルニ、人ノ不レ絶ズ候ツレバ不レ申ザリツルヲ、(今昔20ノ6)

「我レコソ此題ハ作抜タリト思フニ、文時が作レル詩亦微妙シ」

ト被レ仰テ、(今昔24ノ26)

右の特殊型五、六は活用形のはっきりしている例であるが、終止・連体同形で形態上からは区別できないものに次の諸例がある(註12)。

我が云ツル事ヲバ嗚呼ノ事ニ思テ、為得タル気色極カリツレドモ、定テ其ノ岳ノ辺ナムドニコソ、戦ヒ極ジテ臥セルラム。(今昔25ノ5)

弟「音ニ付テ射候ツレバ尻答フル心地シツ。明テコソハ当リ不レ当ズハ行テ見ム」(今昔27ノ34)

介「兎ヲ取隠シテ人ヲ迷ハサムト心得テ、只嘖ニ嘖テ、戯モ可レ為様有テコソ、忌々ク此ル事シテ人迷ス」ト云ヘバ、(今昔26ノ5)

此ノ人達ノ説キ給ハムヲ聞キ給テコソ、若干ノ罪ヲモ滅シ、命ヲモ長ク成給ハムト勸ヨ。(今昔19ノ4)

なお、最後の例は構文上次の例が参考とならう。これは已然形結びとなつている。

若キ程ノ心不レ定ヌナラバコソ出家ヲモシ、身ヲモ投ゲ給ハメ。(今昔 19ノ17)

△特殊型七▽

次に列挙する諸例は「こそ」に対して助詞「よ」で応じたものである。

其女コソハ汝が家ノ屎尿ノ穢淨ツル女ヨ。汝ハ七宝ヲ天下ニ満テ世間ヲ恣ニスト云ヘドモ、汝が果報ハ彼女ニ劣レリ。(今昔 3ノ21)

これこそこの山にすみ給文殊よ。我にものがたりしに來給なり。

(宇治 14ノ1)

「あれは變化の物ぞ。われこそそよ。」といへどもきゝいるゝ人なし。(宇拾 6ノ3)

とし比不動尊の火ゑんをあしくかきけるなり。いまみればかうこそもえけれど心えつるなり。これこそせうとくよ。(宇治 3ノ6)

6)

助泥ガ候コソハ破子候ヨ。皆モ可レ仕ケレドモ、催セト候ヘハ半ヲバ催シテ、今半ヲバ助泥ガ仕ラムズル也。(今昔 28ノ9)

次の例は助詞「ぞかし」で応じている。右の異型といえよう。

入道の君こそかゝる人はおかしきものがたりなどもするぞかし。

(宇拾 14ノ11)

△特殊型八V

最後に「さればこそ」となったものをとりあげよう。終止形で結んだ用例がかなりみられる。

章家「然レバコソ此ニハ寛有ケリ」ト云テ、(今昔 29ノ27)

男「然レバコソ此ハ只物ニハ非ザリケリ」ト思テ、(今昔 30ノ14)

「然レバコソ此レハ様有ル事也ケリ」ト奇異ク見ル程ニ、(今昔 19ノ44)

19ノ44)

さればこそたゞ人にはあらざりけり。仏などのへんじてありき給にや。(宇治 2ノ1)

然レバコソ我レハ鬼ノ家ニ來リニケリト思テ、(今昔 12ノ28)

然レバコソ人ノ龍ノ体ヲ見テ病付ヌルニハ、其治ヨリ外ノ事无シ

ト云ケレバ、(今昔 24ノ11)

この異型としては助詞で応じたものがある。

然レバコソ此ハ様有ル事ゾト思ツルニ、(今昔 20ノ4)

然レバコソ、実ノ仏ハ何ノ故ニ俄ニ木ノ末ニハ現シ給可レキゾ。

(今昔 20ノ3)

然レバコソ此ル夜來タラム人ヲ哀レト不レ思ザラムヤ。(今昔 30ノ1)

30ノ1)

然レバコソ極キ事有トモ被レ蕩ナムヤ。(今昔 29ノ33)

これらの用例は「さればこそ」で切つて二文とみる見方もある(註

13)が、次のように已然形結びも諸例がみられるのである。

サレバコソ只ハラハセヌ人トハ見レ。此老僧モ猶故有ム物ナラ

ム。(打聞 5)

然レバコソ夜前ハ此ノ奴ノ迷ハシケル也ケレト云テ、(今昔 27ノ37)

然レバコソ不用ノ童トハ云ヒツレ。吉ク此レヲ不レ知シテ讀メ合

ヘル也。(今昔 12ノ34)

然レバコソ申ツレ。今ハ咲ヒ飽キ給ヒヌラム。(今昔 24ノ22)

さればこそ申さぶらはじとは申て候つれと申に、(宇治 3ノ17)

このように用例は多い。

四

前章においては「こそ」による特殊型の強調表現を形態上から八種類に分類して考察した。文法的破格と呼ばれてきたこれらの表現をどのように理解したらよいのであろうか。その解釈として次のような仮説をたててみる事ができるかと思う。

一、単なる作者の書き誤り、又は伝写の誤り。

二、特殊な表現効果を狙った。

三、平安朝在来の用法の継承。

四、係結の法則の崩壊現象のあらわれ。

第一の仮説に該当するものはいくつかあるかもしれない。しかし、形態的に種々相のみられること及び用例数の比較的豊富なことの二点によって一応否定しておく。

第二の仮説について今明らかに特殊な表現効果を狙ったと考えられるのは、特殊型七「こそよ」がそれであろう。これについては山田巖氏が今昔物語の二例を指摘して、 \wedge 「こそ」の用法中、注意すべきものは、主語に「こそ」をつけて、文末を「よ」で結ぶ言いまわしである。この場合「よ」は指定の「なり」にあたる意味をあらわすのであるが、「こそ」や「よ」という助詞を用いて構成されている表現法であるから、強い強調表現であったと解すべきであろう。V(註14)と述べておられるが、「こそよ已然形」が強調表現としての強さを減じてくると共にそれではあきたらず、更に強い強調表現として好んで用いられるようになったのであろう。佐伯梅友博士は源氏物語の会話文中に「こそよ已然形」が数例みられることを指摘しておられる(註15)が、一脈通じるところがあるように思う。その他の特殊型では、「さればこそ」は別として、特殊な表現効果を狙ったと解釈できるだけの用例数がない。

第三の仮説は平安朝の資料を調査してみる必要があろう。奈良朝においては「こそ」に応じて形容詞の場合連体形が用いられているが、これは形容詞の已然形の未発達が原因であり、平安朝になると已然形で応じているから彼と此とを結びつけて考えるわけにはいくまい。そこで、他に用例を求めるに確実性のある資料という点で充

分満足が得られない。果して平安朝の姿のまゝで伝っているか疑問が残るが、次に調査した資料の用例を列挙してみよう。

わが本意には、いと花やかならざらむ女の、物思ひ知りたらむが、容貌をかしげならむをこそ唐土新羅までもとめむと思ふ。(落窪物語 朝日古典一九五頁)

みなほほゑみてないしのかみあかはなにかしこそそまんとおもふをひたうにもおほしかけけるかななどのたまふに、(源氏物語 大成 行幸 九〇八頁)

しげさはしる人もなしとこそ思ふたまへし。(蜻蛉日記 岩波古典大系二四一頁)

和泉式部といふ人こそ、面白う書き交しける。(紫式部日記 岩波文庫六四頁)

されはこそことものかは也けりと云 (竹取物語總索引)
さればこそ天ぐななりとて、(宇津保物語 俊蔭 岩波文庫八四頁)

これらの用例がたとえ原形をとどめているにしても、分量の割に僅少であることからみて、直ちに中世初期の特殊型に結びつくと考えられるのは早計であろう。「さればこそ」のイデオロム化は平安朝に遡れるとしても、他の特殊型はやはり何か別の力が作用して誤ったとみる方が穏当なではなからうか。たとえ已然形で終止すること自体が特殊なだけに誤り易いものを内在していることは事実であろう。

ところで平安末期の資料になると(やはり資料の確実さに疑問を残すが)、比較的用例数も多くなっているようである。平安末期の資料と断言できないものもあるので、当期に続いてゆく資料という意味で次に用例を示そう。

五日といふ日、生れたまへりけむこそ、いかに折さへ花やかにめでたかりけむとおぼえはべれ。(大鏡 朝日古典六八頁)

このおきなも、その頃大宮なる所にやどりてはべりしかば、御声にこそおどろきて、いといみじう承はりしか。(大鏡 前掲一七五頁)

まして神の御心に、さまでほしく思しけむこそ、いかに御心おこりしたまひけむ。(大鏡 前掲二〇〇頁)

昔かうやうけん侍りけんはながくといひ侍りける人などこそ、名を伝へ侍り。(浜松中納言物語 新註国文学叢書二六三頁)

それこそいとみじかりけることよ。(浜松中納言物語 前掲二六一頁)

そのとどまりおはします女宮こそは、大齋院よ。(大鏡 前掲八一頁)

かの大將の妹の宣耀殿の女御の産み給へりし、八の宮こそは、世の痴者のいみじき例よ。(榮花物語 日蔭かつら 岩波文庫 中八四頁)

一方ならぬ花の色々をこそ尽し重ねておはすらむかしと、(浜松中納言物語 前掲二九八頁)

これらの用例は第三の仮説というよりむしろ第四の仮説として考えるべきものではなからうか。言語は余程のことがないかぎり突然に変化することはなく、普通は漸進的に変遷するものであるから、「こそ」の場合もそう考えるのが妥当である。それ故、一般に「こそ」已然形」は中世末期まで保たれたとされるけれども、その崩壊現象は遡って考へるべきであり、種々の点で近代語への転換のきざしをみせている中世初期乃至平安末期にその現象が見られても不自然で

はなからう。しかし、それを断定するには更に次の二点を確認しておく必要がある。即ち、一つは「こそ」より早く減じた「ぞ」「なむ」にも当然類似の特殊型が存在しなければならぬということであり、今一つは当期に続く時代の資料に同類の「こそ」の用例が存在しなければならぬということである。まず前者については、すでに示した第七表によって数量的に知られる。用例数が「こそ」の半数でしかないのは、「ぞ」「なむ」が連体形結びとなりそれが当時勢力を得てきた連体形終止文と重複するからであらう。また「こそ」の特殊型は多種々相がみられないのも同じ理由によると考えられる。一例をあげるならば、

綿厚キ衣一ツヲ給ヒテ、「……」トゾ云テ、内ニ入ニケル。(今昔 25ノ7)

右は形の上では特殊型二に相当するものであるが、Bは「ぞ」と関係しているとみるよりは連体形終止文の一例とみるべきであらう。

それ故この例を特殊型と認めるわけにはいかないのである。次に後者については、当期の資料に続く時代の用例をあげるならば、

これこそみやこつりよ、(古今著聞集 3ノ3)
さればこそ、いよ／＼あさましくやしき事かぎりなし。(古今著聞集 20ノ30)

或ハ魔道ニ墮チ或ハ悪趣ニモ沈ムコソ口惜心ナルヘシトテ、(広本沙石集 1ノ7)

是コソ小袖一ノ慰ト思ヒハカライタルナリ、(広本沙石集1ノ7)

ナニシニタフト仰セラルレハ召返ス也トコソノ給ケル、(広本沙石集 1ノ7)

此レコソ 我カオハ御前ノモトヨトテ、(広本沙石集 2ノ4)

仰付ラレタル人、コレヲ失ト申ケルヲ、(広本沙石集 5末ノ1)

沙石集には用例が多い。戦記物になると、特殊型五・六・七の用例が延慶本平家物語にみえる(註16)のをはじめ、用例は多くなっている。更に抄物にも少からずあることが知られている(註17)。つまり、中世初期にみえる特殊型は漸増の様相を示しながら中絶することなく中世末期に及んでいるのである。以上、中世初期の特殊型は一部に平安朝在来の用法や特殊な表現効果を狙ったものがあるにしても、まずは係結の法則の崩壊現象のあらわれという線上でとらえるものである。松村明氏は徒然草の「ぞ」の用例一特殊型一に相当しを指摘して係結の法則の弛緩とされた(註18)が、当期の「こそ」の特殊型はそれ以上に注目されるものであると思う。

結局、前述の八種の特殊型は第四の仮説を中心として第二・第三(或は第一も)の仮説が織り混ったものであるとみてよからう。このようにみえてくると、「こそ」已然形」の崩壊現象は単一コースをたどったわけではなく、外的条件も加わって複雑な様相を示しながら漸次崩壊していったと考えられる。

(註1) 次に底本として使用したテキストを示しておく。法華修法 一百座聞書抄(未定稿別冊)・打聞集(国語学資料第八輯)・今昔物語集(新訂増補国史大系)・梅沢本古本説話集(岩波文庫)・宇治拾遺物語(新訂増補国史大系)。なお今昔 宇治は校異のあるものを採らず、百座・打聞・古本は随時写真複製を参照し本文を訂正したところがある。また、韻文中に出てくるような特殊例は採っていない。

(註2) 永井泚氏「係助詞ぞ・なむ・こその本質意義に就いて」(国文学攷第四卷第一輯、昭和13年9月)・宮坂和江氏「係結の表現価値―物語文章論より見たる―」(国語と国文学昭和27年2月号)。なお、今昔物語を採りあげたものに次の論文がある。水野良子氏「係結の表現よりみたる今昔物語の文体」(愛知県立女子大学「説林」I、昭和32年12月)・松島典雄氏「今昔物語に現われた係結の表現価値」(福井大学「国語国文学」第八号、昭和33年10月)。

(註3) 今昔物語には漢文脈・和文脈の問題があるので参考までに巻別に示しておく。係結は平安朝において和文脈の文章に多く、漢文脈の文章に少い。従来、今昔物語の文章は天竺震旦・本朝前半が漢文脈、本朝後半が和文脈と言われてきたが、この表もその説をほぼ裏付けている。なお、水野・松島両氏も別に表示しておられるが、底本の違いによる差異がみられる。(次頁の表参照)

(註4) 永井泚氏前掲論文所載。以下平安朝の場合は表示しない。

(註5) 宮坂和江氏前掲論文。

(註6) 第七表の「その他」は主に結びに校異のあるものを指す。

(註7) 阪倉篤義氏「歌物語の文章―ナムの係り結びをめぐって―」(国語国文昭和28年6月号)参照。

(註8) 中田祝夫博士「平安時代の国語」(「日本語の歴史」所収)。

(註9) 山内洋一郎氏「院政期の連体形終止」(国文学攷第21号、昭和24年7月)参照。

(註10) 大野晋氏「日本古典文法―その一・ヨソの係り結び(十)

―」(国文学解釈と鑑賞昭和32年3月号)。

部立	助詞		なむ	こそ
	卷	ぞ		
天竺震旦	1	2	0 (36)	6
	2	5	3 (40)	5
	3	4	4 (34)	15
	4	11	12 (38)	15
	5	6 (1)	22 (27)	17
	6	0	3 (44)	2
	7	3	8 (31)	1
	9	0	9 (43)	2
	10	32	29 (38)	23
	小計		63 (1)	90 (331)
本朝前半	11	10 (1)	18 (28)	12
	12	27 (1)	15 (37)	15
	13	16 (1)	8 (38)	4
	14	28 (1)	8 (37)	23
	15	46 (1)	20 (42)	14
	16	33	30 (35)	39
	17	20	15 (42)	15
	19	64	65 (31)	71
	20	32 (1)	28 (33)	28
	小計		276 (6)	211 (323)
本朝後半	22	34	30 (7)	11
	23	23	18 (14)	24
	24	53	154 (50)	59
	25	22	38 (12)	37
	26	75	37 (20)	97
	27	60	59 (40)	68
	28	87	104 (39)	83
	29	80	80 (29)	68
	30	29 (1)	57 (10)	32
	31	54	68 (27)	60
小計		517 (1)	645 (248)	539
総計		856 (8)	946 (902)	846

(註11) 佐藤喜代治氏「古典解釈のための助動詞」(国文学解釈と鑑賞昭和32年11月号)参照。

(註12) 金田一春彦氏「国語アクセント史の研究が何に役立つか」(「言語民俗論叢」所収)によれば両形はアクセントから区別可能とされるが、未だ本稿に利用しえない。

(註13) 日本古典文学大系「今昔物語集三」二八一頁頭註九。

(註14) 山田巖氏「今昔物語の文法」(「日本文法講座4所収」)。

(註15) 佐伯梅友博士「仕りまつりにくき宮仕にこそ侍れや」(未定稿第三号)。

(註16) 山田孝雄博士「平家物語の語法」一六九三頁・一八六六頁。

(註17) 湯沢幸吉郎博士「室町時代言語の研究」三四八頁。

(註18) 松村明氏「国語史から見た徒然草」(国文学解釈と鑑賞昭和32年12月号)参照。